

自然主義の成立と展開

岩永 胖

ユタカ

【著者紹介】

1936年熊本県生まれ。早大卒。元東京学芸大学教授。自然主義，とくに田山花袋研究の権威として知られた。1970年没。著書『自然主義文学における虚構の可能性』他。

自然主義の成立と展開

定価千参百円

著者 岩永 胖

発行者 荏沢 謙

印刷 和田 重 春

製本 三浦 堯

一九七二年五月十五日 印刷
一九七二年五月二十日 発行

発行所
審美社

東京都千代田区神田神保町2-40
振替東京七二二七五番

自然主義の成立と展開
目次

第一部

自然主義の成立と展開

九

「没理想」論争と自然主義

四

近代日本文学の封建的基礎

六

第二部

田山花袋の世界

八

花袋文学の二面性

二七

『名張少女』——田山花袋作

三〇

独歩と自然主義

三三

独歩とその文学における政治と恋愛

三五

『破戒』成立の根本問題

一八

徳田秋声の自然主義

三五

『無著庵日記』『秋声録』について

二五

秋声『縮図』の研究

二七〇

第三部

国木田独歩と恋人信子の秘密

二九三

独歩の『欺かざるの記』

三〇七

独歩と水谷真熊

三一

泡鳴の離縁状

三六

岩野泡鳴の履歴書

三九

花袋と『百夜』の主人公

三四

あとがき (大久保典夫)

三六

自然主義の成立と展開

第一部

自然主義の成立と展開

一 成立

日本自然主義文学の成立という問いには、その大体の輪郭が描かれた当初の事情について、答えなければならぬように思われる。しかし、自然主義が一応の輪郭を描き出した事情ということになると、藤村の『破戒』や『家』、花袋の『蒲団』『生』ないしは『重右衛門の最後』あたりまで説明しなければならぬことになる。それに国木田独歩についても、従来の説明ではこれを除いているのだが、独歩の花袋に与えた影響を見れば、これは除外し得ない点だと思う。

展開の端初を、『破戒』に求めるか、『蒲団』に求めるか、あるいは『重右衛門の最後』にするか。自然主義の意味のとり方によって、相当の幅をもったものになりそうで、単純に図式化し得ないのではないかと思う。

ところで、**自然主義**ということになると、まずフランスのナチュラリズムあたりに源を引くもののように受け取られるのであるが、これは主義という言葉が外国からの輸入語であり、ナチュ

ラリズムの翻訳として考えられもするからである。ゾラの自然主義という言葉が、すでに森鷗外の初期の作品が出はじめの頃に新聞などに伝えられたのは、明治二十年代であつたし、追鷗二家の没理想論争で、自然の面影などという言葉が使われたのも、いわば自然主義文学がいわゆる成立を遂げる前触れになっているようである。

このフランス実証主義の上に咲いたゾラリズムのように、西欧的な思考に、身を寄せて描き上げようとした作品は、前期自然主義といわれるものであつた。それらの作品の中で取り立てられるのは、小杉天外の『はやり唄』『初姿』、永井荷風の『地獄の花』などである。しかし、これらとても、ゾラリズムに身を寄せているとはいへ、結局はこの国の人々の名前や事情に衣をきせ、化粧をしているのであり、外国人の感受性が和風との調和の上に導入されているといふべきであらう。ところで、このような作品の中に、田山花袋の『重右衛門の最後』がかぞえ上げられるのが従来通説であるが、この作品は『野の花』とともに、自然主義の成立前の、いわば前期的な意味をもつものとされているのである。しかし、『地獄の花』や『初姿』『はやり唄』などが翻案的な色調を色濃くもっているのに対して、『野の花』や『重右衛門の最後』がゾラリズムの影響をまともに受けているのは前者と同断ながら、それとは異質の要素をも強くもっている事實は、見落されてはならないのではないだろうか。そして、それは花袋文学がどのように外国文学の思潮に影響されても、最終的にはもちつづけている素質的で、伝統的なもののようなものである。それは彼の趣味的な漢詩、漢文にしても、また和歌にしても、新体詩にしても、甘い感傷性はあるながらも常に自己の経験を通して、事実とつながっている——潜在的なリアリズムを背後にもっているということである。『ふるさと』を始めとする甘い恋愛や感傷性に充ちた数多くの小説は、す

べて空想的ではありながら、現実の経験に材を得ているのであった。

『はやり唄』や『地獄の花』に比較すると、同じく生のままの観念的なゾラや、露西亜文学の影響を露出してはいながら、色濃く現実の風土、条件に鋭く対決している姿勢をもっている——『重右衛門の最後』は、そのような貴重な閃きを示している作品になっているのである。このことは外からの影響などとは違って、長い間の現実凝視の中から深まった無意識的成果として評価すべきではあるまいか。またそれは文学以外の領域からする人間的な覚醒に促された鋭い追及が思わずもなしとげた切れ味であるかも知れない。しかし、それは、作者個人としては無意識であっても、このような自覚そのものは潜在的にあった抵抗と批判が、重い地殻を破ってほとばしり出たものではなかったか。表面的には一介の農民藤田重右衛門が村落社会から疎外されて、悲惨な最期をとげたに過ぎない事件に、社会の改革への契機さえ見出しているような作者の眼は鋭く焦点をえぐっている。これが現実の長野県赤塩村にあった実名小説であるところに、大きく評価さるべきものがあるろう。

ここには疎外されている自己を主張し、それを抑圧しようとするものに対して最後まで抵抗する者の姿勢がある。それは外国の思想や文学からの影響によって生じた主張ではなく、自然発生的に封鎖的な農村社会に対して生じ来った抵抗感覚である。田山花袋はずいぶん西欧思想や文学やらによって影響され、その影響による主張もかかげたりしているし、また『重右衛門の最後』にも消化し切れないそれらの思想を書き散らしているのだが、『重右衛門の最後』をかけての抵抗は、重右衛門自体に属しているのであり、それを素直に直視したところに作品『重右衛門の最後』の抵抗的な性格が生じ来っているのである。花袋にはずいぶんと思い違いや、そそっか

しいところがあるが、何よりも彼の特長は率直に現象に向って直視する姿勢をもっていることであり、この姿勢こそ人間的な感受性を成長させ、健康な文学を作り上げるものになっているものである。私が自然主義文学の基本的な作家として花袋を採り上げるのは、その他の作家と違った体質的な素朴さが、多くの失敗も含めて彼に属しているからなのである。藤村、白鳥、秋声等とはやや違っている。似ているのは泡鳴であるが、彼よりも、花袋は庶民的である。島崎藤村の『破戒』は抵抗の文学といわれているのだが、『重右衛門の最後』はそれとは比較にならぬ異質の現実的な抵抗性の強い作品である。ただ、せっかくの材料が、花袋の外国文学からの影響による観念にかえってスポイルされている結果にはなっているが。

自然主義の発想を自我意識のめざめに基づく市民社会形成への意欲としてとらえる方法は、たしかに多くの研究家によって採用されているが、これも外国文学からの影響を過大評価するのと同様に、このような個人主義の根基の一つに数え上げられても、またそれとは反対の自己疎外も自然そのものの内在的な本質として存在し得ているのである。自己主張と自己疎外とが、正反対の性質にありながら、同じく自然の属性としてある。市民社会形成の方向として定立しようとする自我の主張と、それとは背馳した自己疎外の方角とが結び付きながら、交互にそれが現れるところに錯誤と矛盾に充ちたわが近代の基底を示すことになっている。それはわが近代社会の恥部をむき出しにするものであり、つぎはぎだらけの矛盾をさらけ出すことになっているのである。これを田山花袋は「雑多紛々」ということでとらえようとした。「露骨なる描写」といい、「ありのままに」事実をとらえるという。習俗打破、旧道徳の破壊という。それは自我意識を疎外に對立せしめることであり、あるいはまたかえって疎外をもって自我を抑制しようとすることでもあ

る。自我の主張が極めて西欧的な匂いをもっているのに対して、自我の疎外が日本的な、伝統的な態度をもっている。一方が近代的であり、一方が封建的な基調をもつものと信じられてきたことは、とにかく現実があるがままにとらえようとすることで中和せられることにもなっているのである。このような事情は現実の情態を一本の調子ではしり難いものにしていて、花袋、藤村、秋声、白鳥、泡鳴らにある共通性の把握をさまたげているのであるが、それは一本調子でない、自我の主張と疎外とが交互に立ち現れる複雑さにこそ、自然主義の根基として求めらるべきものがあるとしなくてはならないであろう。

自然主義文学の声が聞かれた明治三十年代のころから、明治末期、大正期、昭和期まで、いわゆる自然主義の作家たちが活動しつづけた内部過程として、現実に対する抵抗、現実からの逃亡、自己疎外というように、この主義の旗の下に、種々の変遷があつたことを特記しておくべきであろう。

これらの変遷と多様な姿にもかかわらず、自然主義と一様に呼ばれているところには、人間の主観や努力によつては、いかんともし難い現実のデグザグした進行過程を諦視する姿勢を一樣にもつにいたっているという点にあるのである。いわば、自我の主張から自我の疎外にいたるまで、種々の姿勢はとられながら、結局はいかんともしがたい運命的な力を現実がもっているという認識を内部にひそめている点に、人間に対する自然の優位性を認める態度ができているという点であろう。自分の内部に畳みこまれた道徳、習慣から自我を解放するということは、はなはだ西欧的でありながら、しかも自我を疎外する自然に惹かれる——これははなはだ日本的であるといわねばならぬ。この二つの態度を軸として人間をとらえるところに日本自然主義成立の要件はある

としなければならぬ。

日本自然主義は、片方にゾライズムの実証主義的な人間臭さが聞かれ、片方に没理想論争に見える超越的な自然そのものが追求されているのである。そして、それらの奥底に苦しみと悩みが寄せられ、最後に苦しみの底からほの明るい日本的な虚無感が現れてくる。日本自然主義を形成する要素は多種多彩でありながら、しかもその色彩が艶消しになっているのは、近代日本の社会のもっている可能性に対する触覚が深く内部に蔵している萌芽そのものの性格によるのであろう。それは市民社会を待望する自由、それ自体社会的連帯性の自覚に支えられた自我の主張をもつよりは、それに背を向けるエゴイズムの疎外感覚に骨の髄から犯されているといつてよいかも知れない。花袋、藤村はおろか、秋声、白鳥にいたる系列はすべて、最終的には社会に背を向けたエゴイズムでしか文学を築き得なかったのだと思う。自然主義文学はエゴイズムを核として、外に向かつては自己防衛の姿勢をとりながら、内部的には孤立した自我の無力さをひしひしと感じとっているところに、なり、たちの根拠をもっていると言えようかと思う。

文学作品の中核としてエゴイズムを形成し、自我の充足をはかろうとする——しかもそれによつてはとうてい充足され得ないところに、孤立した自我の無力と疎外が感じられ、空しいマンネリズムの中にせつかく築き上げたエゴイズムすらも放棄して、自己疎外をあらためて生の出発点として考えようとする。それは、あたかも現実に対して正面から自我の主張を対立せしめて、それに抵抗の姿勢をとった自然主義発生の基盤に、はからずも回帰する姿勢になっている。もちろん、内容としては自我の主張のかわりに、自己疎外が代位してはいるが。この疎外こそ、現実に対する抵抗を放棄して、逃亡のなかに自我の充足をはかることによつて続けられた自然主義文学